乾燥地を拓く 7

鳥取大学ITPだより

タフな精神・体力必要

――派遣前に語学研修も――

鳥取大学の若手研究者インターナショナルトレーニングプログラム（ITP）に参加できるのは、鳥取大学大学院修士課程1年生の学生です。海外の乾燥地の現場で研究してみたい学生なら、所属研究科を問わず、誰でも応募できます。

毎年、4月に大学院修士課程の入学生が入学してくると、このプログラムの内容を知ってもらうための説明会を開催します。最近は、ITPに参加したくて鳥取大学を受験しました、と来てくれる学生も増えていて、毎年20人程度の参加があります。

学内選考は、書類審査と面接により行います。面接では、どこでどんな研究をしたいのか、具体的な研究計画に基づいて主体的に研究を進めることができるか、語学力は十分か等について確認します。

最も大切なのは、海外で最大約1年間にもわたる長期の滞在に、精神的にも体力的にも耐えうるタフさを持ち合わせているかどうかという点です。また、自分の力で頑張ろうという意志がなければ、日本で何かと環境も勝手も違う異国の地で、研究に専念することはできません。

厳しい環境ではあるけれど、心身共に健康で過ごし、その中で将来につながるものを見つけてほしい、それこそ私たちが学生に対して最も期待する思いであり、そのために個々の適性を総合的に、慎重に判断します。

学内選考を通過した学生に対して、派遣までに事前説明会を数回行います。渡航前の準備や安全対策、現地での研究計画等について、担当の教職員が説明します。

特に安全対策については、現地で安全に暮らすためにその土地の文化・習慣をよく知り、自分の身は自分で守るという意識を持って行動してもらえるよう、指導を行っています。

今年度、新たに派遣される学生4人が渡航を1カ月半後に控えて、現在語学研修を受講中。海外での授業やべて英語で行われるため、英語のレベルアップは必須

また、派遣までに週1回語学研修を実施して、語学力の強化を図ります。海外で暮らし、研究を行うのですから、それ相応の語学力は必須です。コミュニケーション能力は、現地指導教員との意思疎通を容易にし、現地の人々とのふれあいの機会を増やし、時には自分自身の身の安全を確保する手段にもなる、重要なものです。

（鳥取大学研究・国際協力部職員、大塚卓弥）

（月1回掲載）